

平成 21 年 4 月 30 日現在

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18592353
 研究課題名（和文） 広汎性発達障害の子どもを養育する家族の家族プロセスとQOLに関する研究
 研究課題名（英文） Family process and QOL of Families with Child with Pervasive Developmental Disorders
 研究代表者
 浅野 みどり (ASANO MIDORI)
 名古屋大学・医学部（保健学科）・教授
 研究者番号：30257604

研究成果の概要：

1. 広汎性発達障害(以下、PDD)を養育する家族の育児ストレスと家族機能、QOLの現状調査；PDD児(3-6Y)の母親 149 名への無記名質問紙調査を行った。調査内容は基本的属性、自閉症の子どもの行動特徴質問紙(行動特徴)、PS-SF 実用版、WHO-QOL26、家族機能尺度 (FAI) で、有効回答数は 78 部 (52.3%)、児の平均年齢 5.4 歳±1.1 (男児 66, 女児 12)、診断は自閉症 54%、PDD 26%、HFA13%、Asperger 4%であった。児の行動特徴総点と母親のストレスに有意相関はないが、行動特徴の「限局行動」とPS-SFの「子どもの特徴に関するストレス」は正相関した (Spearman $r_s = 0.54$, $P < 0.01$)。「母親自身に関するストレス」は、QOL-26 全領域と負に相関し (身体領域 $r = -0.63$, 心理的領域 $r = -0.55$, 社会的関係 $r = -0.55$, 環境 $r = -0.61$, $P < 0.01$)、FAI「家族に対する評価」とも負に相関した ($r = -0.66$, $P < 0.01$)。PS-SF 因子分析では 6 因子構造 (孤立・自信のなさ 子の行動の困難さ 育児をめぐる夫との関係 子の好ましい行動の少なさ 育児による心身不調の自覚 子の不機嫌)で、子どもの行動特徴 3 側面が、PSI-SF の第 4 因子と、こだわり行動が PSI-SF の第 2・4・5 因子と有意に関連した。

2. 家族の育児ライフスキル促進プログラム；Strength based approach を重視した Healthy Start Program 研修(オレゴン州)で認定証を受けた。調査結果に基づき、母親の心身リフレッシュと癒しを重視した小人数制プログラム「すきっぷ・ママクラス」を考案し、平成 20 年 12 月より開始した。平成 21 年度末まで第 5 期生(延べ 42 名)に実施し、継続して介入研究を実施中である。データは現在解析中であるが、第 2 期生までの結果、<導入前> <3 か月後> <導入後> を比較すると、母親の育児ストレス PS-SF 得点は有意に低下し、QOL・家族機能は上昇した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,500,000	0	1,500,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
総計	2,900,000	420,000	3,320,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：広汎性発達障害，家族機能，QOL，育児ストレス，ライフスキル

1. 研究開始当初の背景

自閉症やアスペルガー症候群など PDD (pervasive developmental disorders) , ASD(autistic spectrum disorder)の発現頻度は高機能も含めて人口の3-5%といわれ、同胞発生の増加傾向、PDD の増加傾向は米国ほか日本に限らない現象であり、平成16年12月には発達障害者支援法が成立した。これら増加の背景には、自閉症および発達障害の診断技術の向上や育児環境の変化が考えられるが、従来は情緒障害と考えられていた問題に占める発達障害児童の割合が高く、虐待の高危険因子となり得る。主たるケア提供者の大半である母親はストレスや身体的疲労が高く、ソーシャルサポートはストレスを軽減することが知られている。重症心身障害児のように可視的な障害と比較して、広汎性発達障害のように外見からはわかりにくい障害の療育にまつわる問題は、教育/福祉分野の研究が主で医療/看護学分野の研究は十分でない。発達障害児を養育する家族は、一般社会の理解不足や誤解によるストレスや悩みを抱えており、その障害特性から幼児期の親の子育て充足感が低く、子どもの行動や姿に対する認識がネガティブであるほど、実際の子ども行動特性に則した障害の理解や対応の仕方を望んでいた。既に療育を受けていても不満や不信の感覚をもっており、家族の視点に立った支援や説明、状況に応じた育児の具体的アドバイスの必要性は明らかである。また、家族の強みである家族内コミュニケーションや現実的な交渉能力など重要なライフスキルの強化が求められている。

2. 研究の目的

自閉症および軽度発達障害のある子ども

を養育中の家族における「育児ライフスキル促進プログラム」を用いた看護支援の効果について、家族機能、母親の育児ストレス、QOLの変化から明らかにする。

3. 研究の方法

1)研究デザイン；看護介入研究

2)対象；18か月以上の自閉症および軽度発達障害の子どもをもつ母親 35-40名

3)介入プログラムの概要；日常生活で生じる様々な問題や要求に対し、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力を「ライフスキル」と定義し、その中核となる「問題解決」「創造的思考」「効果的コミュニケーション」「ストレスへの対処」を重視し、母親の心身リフレッシュを主目的とする介入プログラム“すきっぷ・ママクラス”(月1回の1クール6回)を実施した。各回のテーマは、第1回出会い(困っていること)、第2回安全(多様性の尊重と家族の価値)、第3回子どもの行動(肯定的な注目)、第4回親の生活(家族のコミュニケーション)、第5回家族の生活(社会生活)、第6回これまでを振り返ってである。

1回2時間(原則)のセッションは、心身リフレッシュ(バランスボールエクササイズ)、ワークショップ(子育てミニヒントを含む)、リラクゼーション(tea break, アロママッサージ)で構成し、1グループ6~7名の小グループ制で実施した。プログラムの目標は PDD の子どもを養育する母親の育児ストレス(PSI-SF)が軽減する 家族の子どもの障害・行動に対する認識変化と癒しスキルの獲得が促進する 母親自身が自分の家族の強みに気づき、家族評価が向上する 家族のコミュニケーション

が促進され家族機能が向上する 母親の主観的健康状態が改善あるいは維持される
とした。

4)評価方法；プログラム導入前、3か月後、終了後に質問紙を用いて介入効果の測定を実施した。具体的測定用具は、自閉症の行動特徴に関する質問紙 家族機能尺度 (FAI) 育児ストレス (PSI-SF) WHO-QOL26 デモグラフィックデータとした。セッション内容については質的分析を行った。

4．研究成果

2007年12月から第1期のプログラムによるグループ介入を開始し、2009年3月までに5G42名にプログラムを実施した。研究開始当初の予測とは異なり、3歳未満の幼児の母親の参加は少なく、4-5歳児および学童期以上の母親の参加希望が多かった。

介入後では、プログラムの目標 育児ストレス (PSI-SF) では母親自身に関する下位尺度得点が有意に減少し、家族機能では家族評価・コミュニケーション得点が有意に増加した。主観的健康状態(QOL)は、心理的側面が改善していた。母親の育児ストレスと家族機能・QOLとは負に有意な相関を、家族機能とQOLとは正の相関をみとめた。PS-SFの因子分析結果から、PDDの子どもの母親においては6因子構造(孤立・親としての自信のなさ、子どもの行動の困難さ、育児をめぐる夫との関係、子どもの好ましい行動の少なさ、育児による心身不調の自覚、子どもの不機嫌)が確認できた。PDDの子どもの行動特徴の3側面のうち、こだわり行動がPSI-SFの子どもの行動の困難さ、子どもの望ましい行動の少なさ、育児による心身の不調という3つの因子と関連するという特徴が明らかになった。

さらに、セッション内容の質的分析から、家族の価値や辛かった体験を言語化し仲間と共有する事やリラクゼーションの効果が確認できた。

5．主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

1. 浅野みどり；予防的育児支援の可能性と課題．日本小児看護学会誌18(1)，2009，査読有
2. 浅野みどり，古澤亜矢子；被虐待児へのケアと支援ふだんのかかわりにおける看護の役割 - 早期発見から予防的支援へ - ．小児看護，32(5)，p524-531，2009，査読有
3. 浅野みどり；予防的育児支援Oregon Healthy Start Program - オレゴン州における集中的家庭訪問サービスの実際 - ．日本看護医療学会雑誌9(1) P55-60，2007，査読有
4. 古澤亜矢子，浅野みどり，大橋幸美，門間晶子，吉田久美子；自閉症児の行動特徴が家族と社会の関わりに及ぼす影響 - 自閉症の子どもの医療場面に関する家族の語りから - ，家族看護学研究 13(2)；p100,2007，査読有
5. 今井礼子，浅野みどり，小林加奈；幼児期の自閉症児をもつ家族の家族機能および支援に関する検討、日本看護医療学会雑誌 8(2)；17-25，2006，査読有

[学会発表](計4件)

1. Midori ASANO，Akiko KADOMA，Kumiko YOSHIDA, et, al., A pilot study; Outcomes from intervention by the skip-mamma program for mothers who have child with pervasive developmental disorders. 12th EAFONS, TOKYO, 2009.3.14
2. 大橋幸美，浅野みどり，古澤亜矢子ほか；18ヶ月児の行動特徴と母親の育児ストレス，家族機能，QOLとの関連．第9回日本看護医

療学会，浜松市，2008.9.21

3. 門間晶子，浅野みどり；自閉症の子どもを育てるシングルマザーの経験，第 15 回日本家族看護学会，藤沢市，2008.9.14

4. 古澤亜矢子，浅野みどり，大橋幸美ほか；自閉症の子どもの行動特徴と母親の育児ストレス，家族機能，QOL との関連．第 18 回日本小児看護学会，名古屋市，2008.7.26

6．研究組織

(1)研究代表者

浅野 みどり (ASANO MIDORI)
名古屋大学・医学部(保健学科)・教授
研究者番号：30257604

(2)研究分担者

門間 晶子 (KADOMA AKIKO)
名古屋市立大学・看護学部・准教授
研究者番号：20224561

吉田 久美子 (YOSHIDA KUMIKO)
名古屋大学・医学部(保健学科)・准教授
研究者番号：40952388

(3)研究協力者

古澤 亜矢子 名古屋大学・大学院医学系
研究科・博士後期課程

大橋 幸美 名古屋大学・大学院医学系研
究科・博士後期課程

山本 真美 名古屋大学・大学院医学系研
究科・博士後期課程

山北 奈央子 名古屋大学・大学院医学系
研究科・博士前期課程